

# 戦国大名毛利氏による伯耆国大山寺の造営事業

——鉄製厨子内地蔵菩薩像の鑄造を中心に——

岡村吉彦

## はじめに

中国地方最高峰の大山の北面中腹に鎮座する天台宗寺院の角磐山大山寺は、寺伝によれば養老二年（七一八）に金蓮上人によつて地藏菩薩が山中に祀られたのが始まりとされる。中世においては、多くの僧兵を抱えた一大地域勢力であつたと言われ、『中右記』によれば、寛治八年（一〇九四）に大山大衆三百人が強訴のため京都へ押しかけたという記述があるほか、近年の大山寺僧坊調査によれば、中世まで遡る約百七十の僧坊跡が確認されている。<sup>〔1〕</sup>

近世以前の大山寺は、地藏菩薩の垂迹である大智明権現を祀る大智明権現社を中核として、中門院・南光院・西明院の三院で構成されていた。それぞれの院には多くの堂舎が建立されていたが、戦乱や災害で何度も焼失・破損し、その都度

再建された歴史を持つ。大山寺に残された棟札写や造像銘等の造営記録には、近世以前の大山寺の諸堂や仏像が数多くの被害を受け、再建された歴史が記されている。

戦国時代の大山寺の造営には、尼子・毛利・杉原・吉川といった戦国大名が大きく関わつた。例えば天文二十三年（一五五四）に大智明権現社や周辺の諸堂舎が大規模な火災に見舞われて焼失した際には、尼子晴久が一族をあげて堂舎・諸像の再興を図り、永祿九年（一五六六）に雪崩が発生して大智明権現社が損壊した時は、毛利元就・輝元が再建を行つている。戦国大名にとつて、領国内の有力寺社を再興することは、領主層のみならず、多くの民衆の人心収攬につながるものであつたと言われており、その過程において領民の信仰は領主への帰属意識の成熟と重なつていったことが指摘されている。<sup>〔3〕</sup>伯耆国有数の宗教的権威で広域的な信仰圏を有

する大山寺の造営は、伯耆国を領有する支配者層にとって、極めて重要な意味を持っていたと考えられる。

その一方で、戦国時代の大山寺の造営や、戦国大名と大山寺との関わりに言及した研究は少ない。

代表的な研究としては、沼田頼輔の『大山雑考』<sup>3)</sup>があげられよう。同書はもともと新聞掲載用の記事として書かれた短編をまとめたものであるが、中世・近世の棟札銘や金石文等を書き写した『諸堂舎棟札写』と呼ばれる資料を主に引用しつつ、戦国大名と大山寺との関わりに言及しており、今なお貴重な研究書となっている。また下村章雄の『大山史話』も一次史料を多く引用しており、大山寺の中世史を繙く上で参照すべき一冊である。筆者もかつて沼田や下村の業績に学びつつ、『諸堂舎棟札写』の内容をもとに、中世大山寺の基本構造についてまとめたことがあるが、同書に含まれる豊富な造営記録の中には未紹介のものも多く、なお検討の余地が残されている。

このような研究状況と課題をふまえ、本稿では、戦国大名が領域支配を展開する上で、地域社会の宗教的権威とどのような関係を取り結び、みずからの領主支配にどう取り込んでいくか、その一過程を明らかにするという観点に立ち、戦国大名毛利氏による大山寺造営について取り上げてみたい。

ここでは特に以下の二点に注目したい。一つは毛利氏による大山寺再興事業の具体像について明らかにし、その特質と意義について考察する。二つ目は近世の造営記録や最近の研

究成果をふまえながら、毛利輝元による金銅地蔵菩薩像の鑄造について検討を加え、一つの仮説を提示してみた。

## 一 毛利氏による大山寺再興について

### (一)『諸堂舎棟札写』にみる毛利氏の造営事業

本章では、主に大山寺洞明院所蔵の『諸堂舎棟札写』を分析対象として、毛利氏の大山寺造営についてみていきたい。

はじめに『諸堂舎棟札写』について触れておく。同史料は大山寺の三院のうち西明院に属する洞明院に伝来したものである。堅帳形式の袋綴冊子から成り、表紙に「諸堂舎棟札写大山寺洞明院蔵」と墨書されている。内容は大山寺が所蔵していた棟札銘・台座銘・胎内文書・金石文等の造営記録を書き写したものであり、承安三年(一一七二)から文政十三年(一八三〇)に至る五十二点の資料が収録されている。筆跡や内容によれば、同書は少なくとも十三名の人物によって、数次にわたって段階的に書き加えられた可能性が高く、最終的な成立は文政十三年をそう下らない時期と考えられる<sup>7)</sup>。写しではあるが、梵字や花押も丁寧に写し取っており、内容の信憑性は高いと思われる。同書に収録された棟札や胎内文書等の原本はほとんど失われており、近世以前の大山寺の歴史を繙く上で貴重な資料である。

この中に、天正十年(一五八二)の毛利氏による大山寺再興に関する棟札の銘文が含まれている。長文ではあるが左に

掲げる。

【資料1】

本社

表書 回廊

(梵) 竊惟、天真独朗秋月、輝從藍而青法界、止觀明靜春華、鮮前代未聞虛空、凡雖法赫湛然、応用類無尽也、雖真如不變、随縁亦無窮也、是以政賢君治世、崇仏殿、豊国家、為愚民安利、建堂舎、招寿福、討例於異朝、漢帝・高宗、在白馬・青龍兩地、覓証於本朝、聖武・桓武在南都・北嶺二寺、①因茲、南閩浮提大日本国信心大守毛利右馬頭大江朝臣輝元、同大将吉川駿河守藤原朝臣元春、同大将小早川左衛門佐平朝臣隆景、一門面々、混心異名、各々等力、抽一心丹誠、瀝無二懇念、修当山再興之白善事、御願意赴何者、夫伯耆国角磐山大山寺元由者、神代草創靈場、仙人窟宅遺跡、殆非所計人間、頗非所及凡智、峰有釈迦・多宝二仏之宝塔、同本迹開顕之鸞嶺、谷有神明仏陀諸尊樓閣、等顕密兼学之花頂、故仁王四代懿德天皇乘雲霞行幸、以下七代孝靈天皇、駕輿車行幸、自爾以降代々帝王、成叡感、帰依之、世々万民投施財、尊敬之、雖然、埽時末法、覃伽藍破崩、属世堯季、值仏閣回祿、住山僧徒、悲歎悩身、参詣貴賤、涕泣潤袖、爰靈瑞通感、信心施主房中国、嘉名早立、毛利一党、萌善根、②举目錄言之、第一鎮主権現大智明神本地地蔵薩埵尊像綵色、

成就之事、第二御宝殿秘仏鉄厨子之内、奉鍍金銅尊容事、第三勝軍地蔵刻彫、既成就之事、第四法華堂造立、已成就之事、第五法華堂本尊普賢薩埵刻彫、已成就事、第六下山社頭修造之事、第七権現回廊二十一間檜皮葺修造、已成就之事、第八仁王堂上葺修造、成就之事、第九龍王御興造立、已成就之事、第十阿弥陀堂上葺、已成就之事、以上右一々広大之建立者、左歴々名将之信力也、③加之、且為諸堂建立、且為出世法味、於東三郡之内一千貫新地寄附之畢、寔是通温古知新遺文、契統絶興廢之盟誓、就中地藏尊者、末世相当之大士、勝軍守護之導師也、現在未来天人衆之宝珠者、保吾今愍懇附属汝之国土、以大方便神通力之錫杖者、弘勿墮罪諸惡趣怨敵、嗚呼開眼奉拝尊容、面貌端嚴、相好魏々、歡喜泪潤裳、摂心奉念本尊、不退鎮護之靈驗、堂々感歎思染肝、視之東□真諦堅固太峰、峨々表虚空仏性無障碍、西湛俗諦常住広海、漫々示法界赫性無差別、若爾者、灯明恒有、統留至仏前之光、香花不断、至弥勒下生曉、冀又合力道俗、皆誇長生樂、出入縑素、悉遊不老之門、重乞信心大檀越輝元公・隆景公・元春公・元長公・元秋公・景盛公、武運増長、領天下、家門榮耀、治国土、乃至那落霞、有頂雲、晴一微、利益之嵐、拜一味拔濟月而已、

天正拾<sup>壬午</sup>曆九月廿四日欽言、

毛利右馬頭大江朝臣輝元判(花押影)

吉川駿河守藤原朝臣元春判(花押影)

右ノ板裏書

毛利少輔十郎大江朝臣元秋判 (花押影)  
吉川治部少輔藤原朝臣元長判 (花押影)  
小早川左衛門佐平朝臣隆景判 (花押影)  
宝殿検校別当法印了本坊幸有 南光院衆頂

中門院衆主  
当山衆頂法印執行浄光院政權

開眼供養導師隆蔵房増耀法印 西明院衆頂

本願  
西光坊秀栄判 (花押影)

大工  
神之市尉氏正 (花押影)

奉行  
伴田助兵衛尉春依判 (花押影)

杉原又二郎平朝臣景盛判 (花押影)

西明院年行事  
蓮観房増仙

南光院年行事  
安楽院円秀

中門院年行事  
大宝房亮舜

短札作記勤息円智 <sup>⑧</sup>

はじめに、この棟札の概要についてみておきたい。まず「本社」とは大山寺の中核を成す大智明権現社(本殿・神殿)を

指している。この棟札は現存しないが、冒頭の「表書」「右ノ板裏書」という記述から、原本は板の両面に書かれていたことがわかる。また「回廊」とあるが、旧稿で指摘したように、中世の大智明権現社は周囲に「北廊」「南廊」と呼ばれる檜皮葺の回廊が存在していた<sup>⑨</sup>。詳細は不明であるが、この棟札は回廊と何らかの関わりを持っていたと推察される。

表書の本文の内容は、毛利一門が心を一にして大山寺再興を図ると述べた上で(①)、再興に至る経緯、再興事業の具体的内容、願意等が書かれている。そして日付の奥には檀越となる毛利輝元・吉川元春・毛利元秋・吉川元長・小早川隆景の五人の毛利一門の名と花押が記されている。

また、裏面には中門院を筆頭に南光院・西明院の三院の衆長の名が書かれ、その奥に杉原景盛の名と花押が記されている。杉原景盛は永禄年間に毛利氏の西伯耆支配の実質的な担当者となった杉原盛重の二男である。盛重はもと備後国神辺城を本拠とする国衆であるが、永禄五・九年(一五六二・六六)の毛利氏の尼子攻めの際に、毛利方として尾高城を拠点に西伯耆の戦いで活躍し、毛利氏が富田城を攻略して山陰地域を支配下に収めると、西伯耆を任されて毛利氏の山陰支配の一端を担った。永禄九年十二月二十五日に盛重が死去した後は、嫡子の元盛が後継となったが、大山寺の造営については弟の景盛が担当したと考えられる<sup>⑩</sup>。

杉原景盛の署名の下には本願・大工・奉行と三院の年行事の名が記されている。このうち本願・大工・奉行の三名につ

いては、それぞれ寺院・職人・武家の実質的な造営責任者であったと考えられる。また、年行事については、旧稿で明らかにしたように、各院の寺務の所管や寺領経営のほか、大名権力との対外的窓口を担った役職である<sup>⑫</sup>。この六名が毛利氏の再興事業において、実務的な面で中心的役割を果たしたと考えられる<sup>⑬</sup>。

## (二) 毛利氏による大山寺造営事業の内容

次に、再興事業の具体的内容についてみていきたい。【資料1】の②によれば、毛利氏が行った再興にかかる造営事業は以下の十件である。

- 一、鎮主権現大智明神本地地藏薩埵尊像の彩色(成就之事)
  - 二、御宝殿秘仏鉄厨子之内の金銅尊容の鑄造
  - 三、勝軍地藏の彫刻(既成就之事)
  - 四、法華堂の造立(已成就之事)
  - 五、法華堂本尊普賢薩埵の彫刻(已成就之事)
  - 六、下山社頭の修造
  - 七、大智明権現の回廊二十一間の檜皮葺修造(已成就之事)
  - 八、仁王堂の上葺修造(成就之事)
  - 九、龍王御輿の造立(已成就之事)
  - 十、阿弥陀堂の上葺(已成就之事)
- このほかに、場所是不明であるが、伯耆東三郡(河村郡・久米郡・八橋郡)内の千貫の地を寺領として新たに寄進している<sup>⑭</sup>。

この造営事業について、少し詳しくみていきたい。

第一項にみえる「地藏菩薩埵尊像」とは、大智明権現社に安置されていた「御神体」の大智明権現像を指している。この像は天文二十三年(一五五四)三月二十四日の夜に本社が大規模な火災に見舞われた際に焼失したが、尼子晴久の手によって社殿・仏像の再興がなされた際に、晴久の嫡男の義久が願主となり、京都七条の仏師康秀・康正父子の手によって彫刻された木像である。その後、永禄九年正月に雪崩によって本社が倒壊し、この本尊も拝殿の外隔子まで押し流されたが、毛利元就・輝元が檀越となつて本社が修造され、同年四月に本尊も彩色されて開眼供養が行われている<sup>⑮</sup>。なお、「成就之事」とあるが、これは天正十年九月段階で事業が完了しているものを指すと考えられる。永禄九年以降、本尊の造営に関する記録は見られないことから、あるいは第一項の本尊の彩色は永禄九年の彩色事業を指している可能性もある<sup>⑯</sup>。また、第三項の勝軍地藏の彫刻については、次の関係史料が注目される。

### 【資料2】

表書但裏無シ

天正十年壬午

(梵) 奉刻彫勝軍地藏尊形

九月廿四日敬白

吉川駿河守藤原朝臣 元春

吉川治部少輔藤原朝臣元長  
別当了本坊幸宥 謹<sup>(16)</sup>

これは【資料1】と同日付で、吉川元春・元長父子と了本坊幸宥が勝軍地蔵を大山寺に奉納したことを示している。了本坊幸宥は【資料1】にも登場する南光院の衆頂であり、同院を統括する「別当」という役職に就いていた人物である。「表書但裏無シ」とあることから、【資料1】と同様に板に記されていたこと、裏面は何も書かれていなかったことがわかる。また冒頭の梵字（読み方は「イ」）は地蔵菩薩を示している。

この勝軍地蔵は現存しないが、これより前の中世の造営記録には全く登場しないことから、天正十年に初めて制作されて大山寺に奉納された可能性もあろう。毛利氏が勝軍地蔵を奉納した理由は定かではないが、勝軍地蔵が軍神として武士の信仰を集めていたことや、勝軍地蔵は愛宕権現の本地仏であり、平安期の『今昔物語集』『地蔵菩薩靈驗記』にも、愛宕山に住む蔵算という僧が伯耆大山で修行をして地蔵菩薩の加護を授かったという説話が掲載されていることから、地蔵菩薩を本尊とする大山と愛宕修験との関わりも指摘できよう。

ここで一つ注目しておきたいのは、この勝軍地蔵の制作が吉川氏と南光院によって行われていることである。筆者は旧稿において、大山寺の造営の特徴として、一山で取り組む場合と院ごとに取り組む場合があり、本社に関わる造営事業に

ついては一山三院で取り組むが、他の堂舎や仏像については、関係する各院が中心となつて行つていたことを指摘した。<sup>(18)</sup>勝軍地蔵が吉川家と南光院によって制作されていることは【資料1】の十件の造営事業の中に、毛利家・吉川家・小早川家といった各家が個別に檀越となつて、特定の院と結びついて造営が行われるケースもあったことを示唆している。

以上の点から、毛利氏の造営事業については、以下のような特徴が指摘できよう。

天正十年の棟札には、毛利氏が檀越となつて行つた十件の具体的な造営事業が記されているが、その中には「已成就之事」とあるように、毛利氏の手によって完遂した過去の事業も含まれていたと考えられる。その上限は永禄年間まで遡る可能性が高く、毛利氏が伯耆国に進出した永禄五年以降の造営事業を書き上げたものと推察される。永禄八年五月頃までは大山寺の中に尼子氏と結びつく勢力もあったと考えられる<sup>(19)</sup>が、永禄九年四月に毛利氏によって大智明権現像の開眼供養が行われていることを勘案すると、少なくともこの頃までには一山として毛利側に味方していたと考えられよう。<sup>(20)</sup>また、この造営事業の中には、吉川家と南光院による仏像制作など、毛利一門の各家が個別に檀越となつて、特定の院と結びついて行われた事業もあったことがわかる。

では、この天正十年の棟札の歴史的意義については、どのように捉えたらよいであろうか。換言すれば、この時期の毛利氏による大山寺再興はどのような意味を持っていたのであ

ろうか。

永祿九年に尼子氏を攻略して山陰地域を支配下に収めた毛利氏は、尾高城主杉原氏と羽衣石城主南条氏を実質的な担当者として伯耆国内の支配を行った。しかし、織田信長との対立が深まる中、天正七年には南条元統が毛利を離反し、東伯耆は吉川勢と南条勢の対立抗争の「境目」となっていく。天正九年十月には因幡鳥取城、翌年六月には備中高松城をめぐる戦いが終結するが、東伯耆における南条氏と毛利氏の戦いはその後も続いていく。

羽衣石城が落城するのは天正十年九月のことであり、ここでもようやく東伯耆の戦いが終結し、伯耆一円が毛利氏の支配下に再び収まっていく。③にみえる「伯耆東三郡之内一千貫新地寄附」の背景には、このような動きがあったと考えられる。

すなわち、天正十年九月二十四日という時期は、天正七年の南条離反から始まった伯耆国内の戦いが終結し、毛利氏が伯耆国に対する一円支配を再開する時期にあたるといえる。この棟札は毛利輝元が伯耆国支配を行うにあたり、既に完遂したものも含めて、毛利氏が檀越となつて行つた造営事業の内容と東伯耆において千貫の寺領を新たに寄進する旨を板に記して、「武運増長領天下、家門榮耀治国土」を大山寺に祈願したものであると考えられる。冒頭に述べたように、大山寺は伯耆国有数の宗教的權威であり、軍事的にも大きな地域勢力であつた。そのため、この時期の大山寺の再興事業は、

単なる祈願だけでなく、伯耆国内の有力寺院との強固なつながりを構築する上で極めて重要な意味を持っていたと考えられる。

## 二 鉄製厨子と毛利氏による地藏菩薩像鑄造

### (一) 鉄製厨子と地藏菩薩像

前章で取り上げた【資料1】の棟札によれば、毛利氏による大山寺再興の十件の造営事業のうち、第二項に「御宝殿秘仏鉄厨子之内奉鑄金銅尊容」とある。これについては「成就之事」という文言が付されておらず、天正十年段階で未完成の事業であつたと考えられる。本章では、この事業について具体的に取り上げてみたい。

はじめに「御宝殿秘仏鉄厨子」と「金銅尊容」について説明しておきたい。

まず「鉄厨子」とは、現存する大山寺所蔵の鉄製厨子を指している。これは承安二年（一一七二）に西伯耆の有力武士である紀成盛が寄進した高さ七二cm（胴部は五八cm）、直径四一cmの円筒形の厨子で（写真）、現在は国の重要文化財に指定されている。

当初、この厨子には四枚の鉄製の銘板が取り付けられていた。しかし過去に少なくとも三度の火災に見舞われて、一枚は消失し、残る三枚も表面がひび割れるなど激しく損傷している<sup>②</sup>。

この銘板には紀成盛が寄進した経緯が記されている。これによれば、承安元年七月二十八日の夜に火災が発生し、「御宝殿」と「御正体」が焼亡した。この事態に対し、翌二年に紀成盛が願主となって再興を図っていく。紀成盛は海六成盛とも言い、海氏の一族である。この成盛の尽力によって、同年七月十日に「宝殿」が完成し、十一月には延暦寺の西上という僧によって「三尺」の高さを持つ金銅製の地蔵菩薩像が鑄造され、鉄製の厨子に収められて宝殿に奉安された。このことから、銘板にみえる「御正体」とは、金銅製の地蔵菩薩像であったことがわかる。



大山寺鉄製厨子（大山寺所蔵）

【資料1】にみえる「金銅尊容」とは、この紀成盛が願主となって鑄造され、鉄製厨子に収められた金銅地蔵菩薩像あるいはそれを継承したものと考えられ、天正十年当時は「秘仏」と呼ばれていたことがわかる。第一項の大智明権現像も「本地地蔵菩薩像」とあるが、京都の仏師によって彫刻された像であるから、金銅地蔵菩薩像とは明らかに別である。つまり、中世の大智明権現社には、「御神体」となる木像の大智明権現像と、「秘仏」と呼ばれた金銅製の地蔵菩薩像の二体の地蔵菩薩像があったことがわかる。

## （二）鉄製厨子と金銅地蔵菩薩像をめぐる謎

ところで、この鉄製厨子と地蔵菩薩像は、一つの謎を含んでいる。

それは、鉄製厨子の銘板に「御鉢三尺金銅地蔵尊容」と記されていることである。つまり紀成盛が寄進した当初は仏像の高さが「三尺」（約九一cm）であった。しかし、現存する鉄製厨子の高さは高さ七二cm（胴部は五八cm）である。したがって現存する厨子の中に三尺の仏像を収めるのは不可能である。

この点について、どのように理解すればいいのであろうか。かつて沼田は、銘板の文字を「御鉢一尺金銅地蔵尊容」と読み、仏像を「一尺」と解釈した。<sup>23</sup>一尺であれば、現存の鉄製厨子に収めることは可能である。しかし、最近のX線による分析によれば、この文字は明らかに「三尺」と読める。<sup>24</sup>



たがって、沼田説は成立しない。

これについて、近年、佐伯純也は興味深い研究成果を発表している。<sup>(25)</sup> 佐伯は鉄製厨子に開けられた孔に注目して詳細に調査を行い、その結果、厨子には四枚の銘板を取り付けた孔以外に、下部にも四つの孔が開けられていることを確認した。現存の鉄製厨子であれば、上部の孔だけで四枚の銘板を取り付けることが可能であり、下部の孔は必要ない。これについ

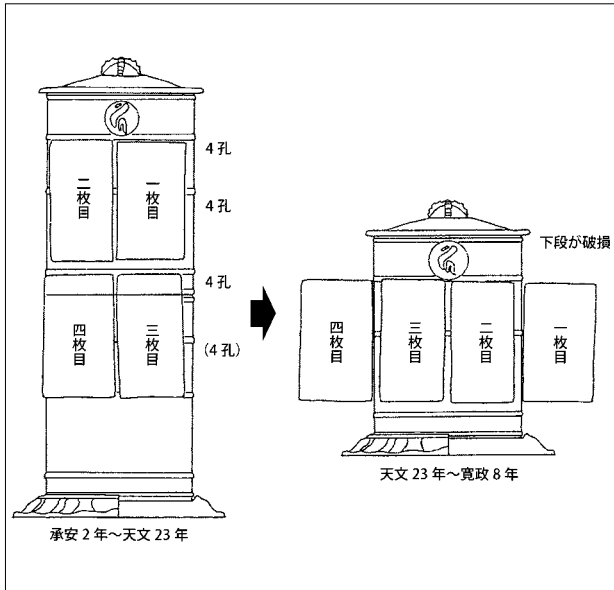


図 1：大山寺鉄製厨子の形状の変化  
佐伯純也（注25）論文より引用

て佐伯は、紀成盛が寄進した鉄製厨子は、当初「二段構造」であり、天文二十三年の大規模火災で一段目が焼失した可能性が高いと指摘した（図1）。

鉄製厨子が二段構造であれば、高さは約一一〇cmとなり、三尺の仏像を収めることは可能である。鉄製厨子の下部の孔も、当初二段構造であったと考えなければ説明ができず、佐伯の説は現時点では最も説得力があると思われる。

### （三）毛利輝元による地藏菩薩像の鑄造

当初二段構造であった鉄製厨子が、天文二十三年の火災で一段目を失ったとするならば、第二項の毛利氏による地藏菩薩像の鑄造はどのように考えればいいのかだろうか。

これについて『諸堂舎棟札写』には次のような史料が収録されている。

#### 【資料3】

本社金銅ノ中ニ入ル写

于時天文廿三<sup>甲寅</sup>三月廿四日時哉、大殿及<sup>ヒ</sup>迄権現本地尊像、一時<sup>ニ</sup>為<sup>ル</sup>灰燼、金銅之地蔵尊亦不能独<sup>リ</sup>存スルコト、

為火焰悉ク<sup>ク</sup>廃損、④従是三十箇年ノ後、天正十壬午、毛

利輝元守中国時、重興回廊、次令治工<sup>ヲシテ</sup>鑄金銅之地蔵<sup>ヲ</sup>、

以<sup>テ</sup>納鉄筒、安之社内、而経<sup>テ</sup>式百十五年、⑤寛政八年

丙辰三月廿四日晝<sup>キ</sup>、天災猶如昔時、因<sup>テ</sup>繼先蹤、復命<sup>シテ</sup>

治工<sup>ニ</sup>、令鑄此像、以蔵鉄筒、安之本殿、威容端嚴而、

最重<sup>シ</sup>長<sup>ケ</sup>尺六寸合掌為跌座、称謂金銅尊体、為永世今以不文記之

文化三丙寅三月日

別当

経悟院法印良諄

執行

清光院法印恵寛

院主

法蓮院栄諄

これは、これまで一度も紹介されたことのない史料である。「本社金銅」中<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>写」とあることから、もともと金銅地蔵菩薩像の内部に納められていた胎内文書であったと考えられる。文化三年（一八〇六）三月に、大山寺三院の長である南光院別当・中門院執行・西明院院主の連名で書かれたものである。

内容によれば、天文二十三年の火災において大智明権現像が焼失した際、鉄製厨子内地蔵菩薩像も焼損したが、三十年後の天正十年に毛利輝元によって鑄造され、「鉄筒」内に納められて本社内に奉安されたところ（④）。これは【資料1】の造営事業の第二項の内容と一致する。つまり、大山寺の鉄製厨子内地蔵菩薩像は、毛利輝元によって確かに鑄造されたと考えられる。

また、後半（⑤）の記述によれば、本社は寛政八年（一七九六）にも火災に見舞われており、仏像も焼損して再鑄され、鉄筒に収められて本殿に安置されている。「長<sup>ケ</sup>尺六寸合掌為跌座」とあることから、このとき再鑄された地蔵菩薩像は、高さが一尺六寸（約四八・五cm）で、跌坐をして合掌する坐像

の姿であったと考えられる。

ここで注目したいのは、「継先蹤、復命冶工、令鑄此像」とあることである。「経<sup>テ</sup>式百十五年」とあるから、「先蹤」というのは天正十年の毛利輝元の鑄造を指すと考えられる。このように考えるならば、天正十年に毛利輝元が鑄造した仏像も一尺六寸の坐像であった可能性が高いといえよう。

すなわち、佐伯の研究成果と【資料4】の内容をふまえれば、鉄製厨子と地蔵菩薩像について、以下のような仮説が浮かび上がってこよう。

承安二年に紀成盛が鑄造した金銅地蔵菩薩像は三尺の高さであった。立像であった可能性もあろう。その仏像を納める鉄製厨子は仏像の高さに合わせて二段構造で制作されていた。

しかし、天文二十三年の火災によって、厨子の一段目が失われ、仏像も焼損した。この時は尼子晴久が中心となって大智明権現社の社殿や仏像の再興を行ったが、この尼子氏の再興事業の中に鉄製厨子や地蔵菩薩像のことは全く出てこない。おそらく、焼損して修復されることのないまま、本社内の宝殿に奉安され、三十年間「秘仏」として信仰され続けたと推察される。

そして、天正十年、毛利輝元は大山寺再興事業の一環として、「秘仏」であるこの地蔵菩薩像の鑄造を行った。輝元は焼け残った鉄製厨子に収まるよう、その大きさに合わせて仏像を造らせたと考えられる。当初三尺であった地蔵菩薩像は、このとき一尺六寸の大きさの坐像になったと推察される。そ

れから二百十五年後の寛政八年、大智明権現社が火災に見舞われ、この地藏菩薩像は三たび焼損した。仏像は毛利氏の先例に倣って再鑄され、焼け残った鉄製厨子に収められて本殿内に安置されたと考えられる。

このように考えると、大山寺の鉄製厨子と地藏菩薩像は、戦国時代にその姿を大きく変えた可能性が高い。当初二段構造であった鉄製厨子は天文二十三年の火災で焼損して一段となり、鉄製厨子に納められていた三尺の地藏菩薩像は天正十年に毛利輝元によって一尺六寸の坐像として再興されたと考えられる。【資料3】の記述は、佐伯の指摘の正しさを改めて裏付けていると言える。

では、毛利輝元にとって地藏菩薩像の再興はどのような意味を持っていたのであろうか。

紀成盛によって「御正体」として寄進された地藏菩薩像は、「御神体」である大智明権現像とともに、中世の大山寺の信仰の中核を成す存在であったと考えられる。天文二十三年の大規模な火災によって、両像とも焼損したが、再興を図った尼子晴久は大智明権現像を新しく彫刻する一方、焼損した鉄製厨子と金銅地藏菩薩像には手を加えなかったと考えられる。以後、この地藏菩薩像は「秘仏」と呼ばれ、本殿内に安置され続けた。

天正十年、輝元は再興にかかる事業の中で、この金銅地藏菩薩像の鑄造を手がけた。それは当初の高き三尺の像ではなく、高さ一尺六寸の坐像であったと考えられる。そこには、

尼子氏もなし得なかった「秘仏」と呼ばれる大山寺の宗教的な核となる存在を、自らの手で新たな姿で再興することにより、大山寺に大きな影響力を及ぼしうる新しい統治者としての姿を人々に印象づけるという目的があったのではないだろうか。その一方で、焼損しながらも四百年以上も守られ続けた鉄製厨子については再鑄せず、残った厨子の大きさに収まるように仏像を鑄造した。そこには、寺院や領民が紡ぎ上げてきた歴史や信仰を尊重した毛利氏の意識が垣間見えるように思われる。

## おわりに

本稿では、主に大山寺に残された棟札の銘文や造営記録をもとに、毛利氏による大山寺再興の具体像やその意義について考察を加えた。甚だ推論に終始してしまった感はあるが、本稿で述べたことを整理しておきたい。

山陰地域とりわけ伯耆国は、南北朝以降、伯耆山名氏が代々守護職を歴任し、有力国衆を支配機構に組み込みながら一世紀以上にわたって領国支配を展開した地域である。また十六世紀に入ると尼子氏が伯耆国を勢力下に収め、こちらも半世紀以上にわたって国内支配を展開した。それに比べると毛利氏の伯耆支配は天正十年段階で僅か二十年足らずと歴史も浅く、いわば新興の領主勢力であったといえる。

その意味においても、毛利氏にとっては、伯耆国の支配を

展開する上で、伝統的な宗教的権威であり、国内の諸階層にとって精神的にも大きな存在である大山寺を取り込むことは重要な課題であったと考えられる。そのため、堂舎・仏像の修理・造営や寺領寄進を通じて、大山寺との強固な関係を取り結んでいく。

【資料1】の棟札が作成された天正十年九月は、山陰地域で最後まで毛利氏に抵抗していた南条氏が国外退去し、国内における戦乱状態が収束して、伯耆一円が毛利支配下に再び収まった時期にあたる。毛利氏はさまざまな造営事業や寺領寄進を通じて大山寺の再興を図っていくが、その中には「秘仏」であった金銅地蔵菩薩像の鑄造など、信仰の中核になる存在を新たに手掛けたものもあった。このような造営事業を通じて、新しい統治者としての姿を地域社会に示すとともに、地域社会に大きな影響力を持つ大山寺をみずからの領主支配に取り込んでいったと考えられる。

毛利氏が領国支配を行う上で、その国の寺社の再興を重視していたことは、次の史料からも窺うことができる。

【資料4】口羽通良書状(清水寺文書)<sup>(46)</sup>

(前欠)

〔雲州〕

□□所帯御持之方へハ、以直書茂案内可有事候、可御心安候、某去年彼寺家見物候而、輝元<sup>(毛利)</sup>へも具物語仕候、世上之仏神へ御馳走候はんよりも、御分国之寺社家御建立

肝要之由申而候、杵築、大山、清水、枕木など御再興、何より以御祈禱をも可成候、又荒はて候ハ、御罰茂御当可有之由申事候、如此右条雖不打算申候、それほど御心茂不被付候而、口惜存候、猶重而可申候、恐惶謹言、

八月五日

(口羽) 通良(花押)

「(切封ウツ書) (墨引)

(天野) 隆重 □ 尊報

下野守 通良

これは、吉川元春・小早川隆景・福原貞俊とともに、若年の毛利輝元の領国支配を補佐した「御四人」の一人である口羽通良が、出雲富田城主の天野隆重に宛てた書状である。年未詳であるが、口羽通良が下野守を称するのが元亀元年であることや、出雲新山城が落城して尼子勝久が出雲から撤退したのが元亀二年八月二十九日であることから、元亀三年以降のものと考えられる。

差出人の口羽通良については、岸田裕之<sup>(28)</sup>、中司健一<sup>(29)</sup>、光成準治<sup>(30)</sup>の各氏による研究が詳しい。これらの諸研究によれば、口羽通良は毛利家を中心的に支えた一人である志道広良の次男であり、石見国口羽を領有したため口羽姓を名乗るが、福原貞俊や桂元重とともに毛利家の宿老の中でも高い地位にあり、毛利家中からも信頼が厚い人物であった<sup>(31)</sup>。

【史料4】の中で通良は、「世上之仏神」に対する馳走よりも「御分国」の「寺社家御建立」こそが肝要であると述べている。そして、「輝元へも具物語仕候」とあるように、この

ことを当主である輝元にも伝えている。通良が元就の信頼を受けて輝元の補佐役に拔擢されたことを勘案すれば、これは元就ひいては毛利家中の考え方が大きく反映されていると考えられよう。

特に通良が「杵築、大山、清水、枕木など御再興」とあるように、出雲国の杵築大社に次いで伯耆国の大山寺の再興を挙げている点は注目される。このことは、山陰支配を行う上で、大山寺の再興が重要であると毛利氏が認識していたことを示している。このような分国の寺社の再興を重んじる毛利家中に受け継がれた考え方が、宿老を通じて輝元に伝えられ、大山寺再興に対する輝元の意識の醸成につながっていった可能性は極めて高いと考えられる。

最後に、その後の毛利氏と大山寺の関係について述べておきたい。

【資料5】大山寺中門院湛舜他二名連署書状（日御碕神社文書）<sup>⑤</sup>

御書致拝見候、抑雲州日御崎為御造営、國中棟別之儀被仰付候哉、就者当山寺領分之儀可申付旨、被成御意候、何分二茂可奉隨貴命候、此旨可預御披露候、恐々謹言、

（天正十三年カ）

九月廿五日

中門院

湛舜（花押）

西明院

増祐（花押）

（元良）  
児玉三郎右衛門尉殿

これは、毛利輝元が出雲国の日御碕神社造営のために、伯耆・出雲・石見諸国に棟別銭を賦課した際の史料である。旧稿で述べたように、差出人の三名は大山寺三院の年行事にあたる人物である。このときの棟別銭賦課は三国内の各所領に對して行われており、大山寺領も例外ではなかった。この中で大山寺側は、寺領に對する棟別銭の賦課を一身として受け入れることを毛利重臣の児玉元良に伝えると同時に、「何分二茂可奉隨貴命候」と言っている。永祿年間以降の造営事業や寺領寄進等の働きかけを通じて、大山寺は確実に毛利氏の支配下に組み込まれていったと考えられる。

本稿は、先行研究の成果に導かれつつ、寺院に残された棟札銘等の造営記録をもとに、戦国期の大名権力と地域の有力寺院との関わりについて考察を加えたものである。結果として、これまで知られていなかった毛利氏の大山寺造営の新たな一面を示すことはできたのではないかと思われるが、一方で、毛利氏の領国支配の中に大山寺との関係を位置づけるまでには至っていない。また、毛利氏のような大名権力を結びつくことが、大山寺にとってどのような意味を持っていたのかを寺院側の視点に立って検討する必要がある。いずれも今後の課題としたい。

注

(1) 『大山僧坊跡調査報告書』(大山町教育委員会、二〇一二年)。

なお、『補庵京華集』によれば三千八百あまりの僧坊があったと言われ、鎌倉時代成立の『伊呂波字類抄』によれば平安期には三千人の僧兵を抱えていたとされる。

(2) 久留島典子『日本の歴史13 一揆と戦国大名』(講談社、二〇〇一年)。

(3) 岸田裕之編『広島県の歴史』(山川出版社、一九九九年) 八五頁。

(4) 沼田頼輔(一八六七—一九三四、文学博士) は明治三十四年から三十六年(一九〇一—〇三)まで米子中学校の教員を勤めた。この時に大山寺に何度も足を運んで精力的に研究を進め、その成果は明治三十六年に松江の新聞「松陽新報」に七、八十回にわたって連載された。それらを野坂寛治が中心となって集成し、昭和三十六年(一九六一)に刊行したのが『大山雑考』である。

(5) 下村章雄『大山史話』(稲葉書房、一九六六年)。

(6) 岡村吉彦「中世における伯耆国大山寺の基本構造」(『鳥取地域史研究』第二〇号、二〇一八年)。

(7) 「諸堂舎棟札写」については、岡村吉彦・米谷均「大山寺洞明院所蔵「諸堂舎棟札写」の翻刻と紹介」(『鳥取地域史研究』第二十二号、二〇二〇年)において全文を翻刻・紹介しており、その中で特徴や成立過程についても論じている。

(8) 『新鳥取県史資料編 古代中世2 古記録編』(以下『古記録編』と略す)。一一六—一一八頁。

(9) 岡村(6) 三八—四二頁。

(10) 『伯耆志』所収小鷹山観音寺所蔵位牌(高橋正弘『因伯の戦国城郭—通史編—』(一九八六年))。

(11) 杉原元盛は天正十一年五月に景盛によって殺害される。こ

の事件に関しては、秀吉が毛利との領地交渉を有利に進めるために密書を出して景盛を取り込もうとしていたことが指摘されている(長谷川博史「戦国大名毛利氏の地域支配に関する研究」所収「豊臣期山陰吉川領の形成と展開」、二〇〇三年)。

その後景盛は天正十二年八月に吉川氏によって出雲平田で殺害されている(『新鳥取県史資料編 古代中世1 古文書編』(以下『古文書編』と略す)。一六一〇号、一六一四号)。

(12) 岡村(6) 四九—五二頁。

(13) 末尾にみられる「円智」については、徳川幕府に寺領三千石を認めさせ、近世大山寺の礎を築いたとされる豪円僧正の初名と同一である。これについて米谷均氏は、ここにみえる円智は豪円の可能性が高いと指摘している(米谷均「文明十一年(一四七九)の大山寺根本中堂の復興勧進について」『鳥取地域史研究』第二十二号、二〇二〇年) 六六頁。

(14) この「東三郡之内一千貫新地」の具体的な場所は定かではない。参考までに「大山寺文書」中の年未詳「尊澄(隆カ)文書目録渡状」によれば、史料上で確認できる東伯耆三郡の大山寺領は「由良・大谷・土井・方見四ヶ郷」である。これらの地域は広大な潟湖と一五六二年成立の『籌海図編』にもみえる「大塚」の港を抱えた水運上の要衝であった。この地域が「東三郡之内一千貫新地」に相当するかどうかは今後の検討課題であろう。

(15) 大智明権現像台座銘(『古記録編』三四頁)。

(16) 『古記録編』三四頁。

(17) 『古記録編』八五一—八五五頁。

(18) 岡村(6) 五四—五八頁。

(19) 「竹矢文書」にみられる次の史料は、尼子氏と大山寺のつながりを示すものと考えられる(『古文書編』八〇〇号)。

(尼子義久)  
(花押)

大山々神々主職之事、渡辺石京大夫同前二遂籠城、依忠儀被仰付、勲社役全無相違可被相計之由、被仰出候、為向後被成袖 御判候、仍状如件、

永祿八

多賀対馬守

五月十三日

久幸(花押)

伊藤大夫殿

(20) 大山寺と毛利氏の結びつきを示す史料として「大山寺文書」には以下のような吉川元春書状がみられる。

(出雲国)

就富田一着之儀、御懇祈之卷数令頂戴候、畏入存候、弥於 神前御丹精所仕候、猶自是可申入候之条、不能詳候、恐々謹言、

十二月二日

(吉川)  
元春(花押)

大山寺衆徒中 御同章

(21) 少なくとも、天文二十三年、寛政八年、昭和三年の火災に見舞われている。この銘板に関して、『伯耆大山寺棟札集』(明治三十六年十月、田中景瑩編、東京大学史料編纂所謄写本)には以下の記述がみられる。

右金銅之銘、天文廿三年三月廿四日、本社回祿之砌焼失、且又寛政八年三月廿四日本社回祿ノ時ニ焼残、猶今ニ本社有之処、是ノ銘寛永十年并天和三年ニ本社ヨリ写取、其節ハ如右文字鮮カニ相ヒ分ク、其後寛政八年之焼失ニ相ヒ、金追々薄ク相成、此度亦々写取候処、文字難見道俗男女ノ下莫不悲歎ノ字ヨリ三間ノ三之字迄、九十一字甚難分、仍之其旨茲ニ記置者也、

明治二己 巳十二月日

清光院実伝記之

この記述によれば、銘板は天文二十三年三月二十四日の本社の火事で被災したが、寛永十年(一六三三)と天和三年(一六八三)に本社で写し取った際には、文字がはっきりと判別できたところ。しかし寛政八年(一七九六)の火災で焼失した際に写し取るうとしたところ、「莫不悲歎」から「三間」の「三」の文字まで九十一文字が判読できなかったと記されている。この判読不能の文字は四枚の銘板のうち第二枚に相当する。

また、大山寺理観院所蔵の「昭和三年 本堂焼失二関スル官庁届出書略」には、昭和三年四月二十二日の本堂火災で焼失もしくは焼損した宝物が記されている。この中に国宝であった「大山寺縁起」等の文化財とともに「地藏尊鉄厨子銘三枚」とある。このことから、四枚中一枚は昭和三年の段階ですでに欠落していたことがわかる。おそらく第二枚は寛政八年の火災後に失われたと考えられる。

(22) 錦織勤「平安末期西伯耆の有力武士「紀成盛」について」(『鳥取地域史研究』四号、二〇〇二年)。

(23) 『大山雑考』二九頁。

(24) 西山要一「伯州大山寺藏厨子銘板の科学分析による製作技法の研究」(奈良大学『文化財学報』三九―五二、一九八六年)。

(25) 佐伯純也「伯耆大山寺鉄製厨子に関する基礎的考察」(『郵政考古紀要』六〇号、二〇一四年)。

(26) 『古文書編』九五五号。

(27) 管見の範囲では『大日本古文書九 吉川家文書』五一四号が「下野守」の初見である。

- (28) 岸田裕之『毛利元就』(ミネルヴァ書房、二〇一四年)。
- (29) 中司健一「毛利氏『御四人』の役割とその意義」『史学研究』第二四五号、二〇〇四年。
- (30) 光成準治『毛利輝元』(ミネルヴァ書房、二〇一六年)。
- (31) 岸田(28) 三六六頁。
- (32) 中司(29) 六八頁。
- (33) 加藤益幹「戦国大名毛利氏の奉行人制について」(戦国大名論集14 毛利氏の研究) 吉川弘文館、一九八四年)。
- (34) 「枕木」は出雲枕木山に鎮座する臨濟宗南禅寺派の古刹である華藏寺を指していると思われる。
- (35) 『古文書編』一六五二号。

## 付記

本稿は平成三十年度に広島史学研究大会で報告した内容をまとめたものである。本稿を成すにあたっては、多くの方々に御指導・御助言をいただいた。また史料の調査に際しては、大山寺住職大館宏雄氏に格別の御配慮をいただいた。記してお礼申し上げたい。

(鳥取県立公文書館 県史編さん室)